20. 心の貧困を救う子ども食堂

安松亮

はじめに

近年、子どもの貧困や孤立、虐待、不登校などをきっかけとし、全国で子ども食堂が急増している。しかし核家族と単身世帯が増加し、つながりが希薄な地域社会に鑑みると、貧困や孤立だけで子ども食堂の急増を説明することは説得力にかける。そもそも子ども食堂とは、地域住民や自治体が主体となり、無料または低価格帯で子どもたちに食事を提供するコミュニティの場を指している。また、単に「子どもたちの食事提供の場」としてだけではなく、帰りが遅い会社員、家事をする時間のない家族などが集まって食事をとることも可能である。このように、「人が多く集まる場所」ができたことで、地域住民のコミュニケーションの場としても機能しているのだ。つまり現代家族に合わせて子ども食堂が急増しているのだと考える。いくら貧困とは言えない子どもであっても家族や地域社会とコミュニケーションを取らなければ心的貧困となり孤立するため寄り添える居場所が必要となる。本論では居場所を主として進めていく。

しかし孤独に怯えるのは子どもだけではない。ここで世界の孤独対策を紹介する。ロンドン北部に位置するカムデン・タウンと呼ばれる地区に孤独な人々が集う場がある。その名も「メンズ・シェッド」である。ここではサラダボウルや置物、作陶などの物作りを通して互いに教え合いコミュニケーションをとることで孤独に陥るのを防ぐ。それは男性の多くは並んで作業している方が互いを分かり合えるからだ。木工は廃材を使い、運営費は作品を売った収益や寄付で賄う。週 1~4 回元造園業や元看護師など様々な経歴をもつ男女 12~20 人が集まる。イギリスでは、世代にかかわらず影響する孤独の問題は、政策的な対応が必要としていて、世界初の孤独担当大臣を任命した。そして、英政府では「孤独」について、「人付き合いがない、また足りないという主観的で好ましくない感情」「社会的関係の質や量について、現状と願望が一致しない時に感じる」という定義を採用した。このように世界では孤独に対して社会的問題と捉え政策を進めている。これらを踏まえ日本でも子ども食堂を通して孤独の対策をすること救われる子どもが多々存在するのではないか。しかし、地域住民や自治体だけでは限度があるため日本でも孤独担当大臣をたて、孤独対策予算を出し政府が絡むことで救われる人が増加すると考える。

日本における子どもの貧困の現状

まず、日本において子どもの貧困をみていく。厚生労働省が発表した「平成 28 年国民生活基礎調査」によると、日本の相対的貧困率は 15.6%となり、7 人に 1 人が貧困状態にあると言われている。このことからも日本の貧困問題は深刻であることがわかる。また、相対的貧困率の 15.6%のうちの半数がひとり親世帯であることも大きな問題だ。ひとり親の場合、家事と仕事、育児を一人で行わなければならない。家事や育児の比重が高いほど、生活がより苦しいものとなる。金銭的な問題だけでなく日々の疲労やストレスが蓄積されていくと身体的・精神的な問題にもつながりかねない。ひとり親世帯は子どもにも悪影響が出る可能性もある。例えば、親はお金を稼がなくてはいけないため深夜まで仕事をし、家に帰れないというケースだ。このような場合、子どもは 1 人で過ごさなくてはいけなくなり、コミュニケーションを取る機会が減ってしまう。コミュニケーションは成長過程において重要な要

素だと考える。疎かになると子どもが大人になった時に苦労する。また、一人では勉強でわからないことがあっても聞くことができず、宿題をする習慣も身に付かないなど学力低下につながる要因が多いだろう。さらに貧困が原因で塾や習い事など、学校以外で学習する機会が少ないことも教育格差につながる。このように貧困は前述したようにお金だけの問題ではないのだ。お金の貧困によって心の貧困が引き起こされるのが現状である。まず私たちが出来る事として心の貧困を救うことだ。そのためにも身近なものとして少しでも心に安らぎを補える場として子ども食堂がある。子ども食堂を上手く利用することが子どもの貧困を手助けになると考える。そして、子ども自身の新たな居場所となり救われる子どもが増えるだろう。

子ども食堂①

では実際に私がボランティアとして参加した２つの子ども食堂について述べていく。私は令和元年 6 月 28 日(金)に豊田市にある、おばあちゃんちはひまわり邸食堂という子ども食堂に参加した。そこでは老人ホームを会場として子ども食堂を行っているため、子ども以外に親御さんやご老人、ボランティアである大学生といったさまざまな年代の人と交流が出来る場所であった。5~8 人ほどのグループに別れて交流した。私の担当したグループでは、男子小学生のサッカー部が 5 人と、そのうちの 1 人の 5 歳の妹とその親であった。その小学生に来た理由について尋ねると親が老人ホームの職員であるため、よく来ると話した。他の小学生はその子に誘われて一緒に来たと述べた。そのなかには初めての参加の子も 3 度目の参加の子も存在した。何度も参加する理由については、①ごはんが美味しいから、②楽しいから、③友達に誘われたからである。

30 分ほど話した後にご飯の準備が始まった。料理のメニューは唐揚げをメインとして副菜、コーンスープ、ご飯、プリンであった。食べ盛りな小学生高学年からすると物足りなそうにも感じたが、おかわりが用意してあり、食べ終わった者から取りに行けるスタイルを取っていて満足している様子であった。食事が終わると共同で行うレクリエーションが始まった。布に穴が空いておりボールを早く入れるというものだった。そこではこれまで関わることの出来なかったご老人や小さな子どもとも交流を図ることが出来た。それからというもの見ず知らずの子ども同士ともジャレ合ったりして楽しそうに過ごしていた。最後にはみんなで歌を歌い会場が一体となったように感じた。

今回の子ども食堂を通して思ったこと。子ども食堂に対して少なからず貧しい人だけが行くと場所といったイメージを持つ人がいると足を運ばない。そのため今回の小学生のように友達と一緒に来ることで、子ども食堂に行くことの抵抗が減り同時に偏見も無くなっていくと思った。また異年代とのコミュニケーションを取る場所はあまりないためこのような場所を活用してほしいと感じた。疑問点としては、来るべき人が来られているのかという点である。もっと小学校などで呼び掛けて子ども食堂を知ってもらいたいと思った。また課題点としては仲の良いグループや知り合いだけで固めたグループがあったのでクジなどで無作為に座ることでさまざまな年代の人と関わることが出来る機会が増えるのではないかと思った。

子ども食堂②

次に 2 つ目に伺った子ども食堂について述べる。令和元年 7 月 12 日(金)に、私は西福寺おかげさま食堂に参加した。

そこは幼稚園に隣接しており、幼稚園児が多かった。またボランティアは多く、大学生以外にも高校生もいて飽和状態となっていた。ボランティア内では受付、レクリエーション、案内、フロア、調理洗い場、配膳といった役割が分担されており各自分業体制で行われた。食事の準備が出来るまでは本殿で子どもたちと交流をした。参加者の多くが幼稚園児との親子連れであり人数の多さに驚いた。食事部屋は 2 つに別れているが一度に全員は食べることが出来ないため、時間を分けローテーションで食べ、各自で解散するシステムをとっていた。まるでお店のような回転率で多くの人が来た。一人の参加者(大人)に子ども食堂へのイメージを聞いてみた。「最初は恵まれない子どもが行く場所と思っていた。今回初めて参加するとおかげさま食堂はアットホームな感じで行きやすかった。食事に関してはみんなで食べるというイメージだったので少し驚いた。本殿ではあんまり会話に馴染めていなかった。せっかく子ども食堂に参加したがあまり他の子どもとの交流が出来なかったのが少し残念だった。」と述べた。回転率を上げてたくさんの人がご飯を食べられる反面、見ず知らずの子どもたち同士の交流に関してはあまり力を入れることが出来ないのが現状だと今回の話を聞いてだと強く感じた。これらの課題策として、小学生の高学年には片付けやお手伝いをしてもらうことでスタッフの負担が減るだけでなく、小学生自身も普段は触れあうことのない年代の人と交流することが出来る。またお手伝いによって社会的経験や知識を増やすことが出来るメリットもあると考える。

またスタッフに子ども食堂の始めたきっかけについてインタビューをとった。「初めは孤独なご老人に焦点を当ててコミュニケーションをとる場としてこの食堂を始めたがいざやってみるとスタッフや子どもたちの圧に押されて帰っていく人が多かった。そこからというもの子どもを中心としてやっている。実際のところはご老人の孤独に対して向き合いたい。」と述べた。最初はご老人を救うために始めたことにとても驚いた。運営者の意思を尊重するためにも対策が必要だと思った。自分の考えとしては子どもとご老人の食事の時間帯をずらすなどをすればゆっくりと食べることが出来るのではないかと思った。しかしスタッフの労力がこれまで以上に必要になる点があり難しい。この問題について考えていきたい。私自身もっと多くの子ども食堂に参加して役に立ちたいと思った。

これからの子ども食堂がもつ滞在的な可能性

この 2 つの子ども食堂を通じて共通して感じたことは皆が居場所を求めて参加しているということだ。子どもたちは「食」を通じて繋がり集まっている。これは子どもから高齢者までのさまざまな世代が交流し、触れあう場として子ども食堂の存在意義が感じられた。子ども食堂を居場所としているのは参加者だけでなくスタッフまでもが感じることである。学生や主婦といったさまざまな年代がボランティアという形で交わり協力することが自分を認め信頼してくれる仲間として意識が芽生えると思った。実際私もボランティアを通じて自分の存在する肯定感や自尊心が改めて感じることができた。よって子ども食堂とは関わる人たちすべてに居場所という認識を与えてくれる場だと考える。またこども食堂は子どもにとって大切な機会である「共食」と地域のコミュニティへの参加の機会になる貴重な

体験ができる場だ。近年、急速にこども食堂自体の数は増えてきているが、まだまだ地方自治体の協力、支援、運営費の問題、スタッフの確保などの課題がたくさんある。一人でも多くの子どもがこども食堂を利用できるように、これから課題解決や問題解決に向けて行政や地域などの地方自治体をはじめ、一人ひとりが向き合うことが必要とされるであろう。

社会がこれから望むべき子ども食堂の姿として経済的理由で十分な食事が与えられない子どもに栄養のバランスのとれた食事を提供すること以外に、家族と食事をとる機会が少ない子どもたちの孤食の改善だ。そして支援の内容は食事だけでなく、コミュニケーションを中心とて地域住民やボランティアの人々と交流しながら、遊びや学習面にも力を入れていくことが必要である。また、調理や片付けなどを大人と子どもとの共同作業で行うことで人手不足の解消だけでなく、日常生活に必要な知識や技能を家族以外の人々との交流の中から伝授される機会を与える場所にもなると考える。核家族化が進む社会で、ひとり親世帯や共働き世帯が増えつつある長時間労働を前提とした現代社会では子どもが家族と交流する時間は減少する可能性が考えられる。そのような状況で子どもが家族以外の様々な複数の人々と日常的に関り合いながら、学習や遊び、共同作業などを通して知識や技能、コミュニケーション力を身に付けていく場所が存在することは、子どもだけでなく社会にとっても非常に意義深く、重要である。子ども食堂は地域や社会全体で子どもを守り、育む場所として今後ますます様々な可能性が期待されるであろう。

これらを踏まえたうえで私は、これからはもっと積極的に子ども食堂に参加し居場所を求めると同時に子どもたち自身も居場所となり心の貧困から救えるよう活動していきたい。また世間での子ども食堂に対する偏見をなくし誰でも気軽に通えるような場として広めて行きたいと考える。